ISSN1881-2848

静岡文化芸術大学 図書館・情報センターだより

温故知新

Shizuoka University of Art and Culture Library News

2023.12 Vol.43

令和5年12月発行
発行所　静岡文化芸術大学　図書館・情報センター
〒430-8533　浜松市中区中央二丁目1番1号
TEL(053)457-6124　FAX(053)457-6125
https://www.suac.ac.jp/library/

Contents

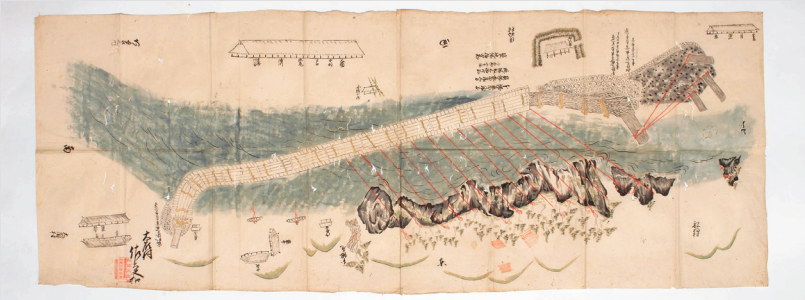
■表 紙
日明御綱絵図 ―― ❶

■図書館散歩
本の思い出と研究 ―― ❷
文化政策学科 教授
曽根 秀一

ひとりになったら本を読む。― ❸
デザイン学科 教授
キャリアセンター長
服部 守悦

■特 集
わたしの1冊 ―― ❹
～おすすめの本を紹介します～

■図書館ニュース
貴重資料「和田文庫」のご紹介 ―― ❽



日明御綱絵図　差出 和田左太夫
作成年不明　絵図　（1枚）　　静岡文化芸術大学　和田文庫蔵

江戸時代初期、天竜川上流域にある信州伊那郡（現在の長野県伊那地方）の一部では、豊富な森林資源を利用して産出した木材を年貢として上納していました。この木材は「榑木（くれき）」と呼ばれ、天竜川を利用して木材を一本ずつ流し送る「管流（くだながし）」という方式で、下流域に送られました。天竜川の流れが緩やかになる「日明（ひやり）」から「船明（ふなぎら）」（いずれも現在の浜松市天竜区）の間には留綱（とめづな）が張られ、流れてきた榑木を遮って留め置きました。今回ご紹介する「日明御綱絵図（ひやりおつなえず）」は、この光景を描いたものです。

留綱を造る材料には、蔓（つる）が強靭な白口藤（しらくちふじ）（藤の一種）・小藤が用いられました。材料を準備して綱を編み、柱を建て、留綱を張る任務は「日明御綱役（ひやりおつなやく）」と呼ばれ、日明・横山・大嶺など北遠諸村の人々が務めました。御綱役は9月中旬より準備を開始し、10月から綱を造り始め、任務は12月中旬まで続きました。時期的に寒い季節に当たることから、天竜の川風に晒され、身を削るような厳しい任務であったと思われます。

留綱が張られる11月から1月頃の間は、天竜川の通船が禁止されました。延宝5年（1677年）に天竜川を往来する船は、伊砂村（いすか）（現在の浜松市天竜区）以北の12村で58艘の角倉船（すみのくらせん）（天竜川を上下して荷物運送にあたった小高瀬船）があったほか、鵜飼船などを合わせると相当な数に上ったと考えられます。さらに、御用材（幕府や諸藩などが必要とした造営補修用材）の管流でも留綱が張られて通船禁止となったため、往来や物流が妨げられて人々の生活を圧迫し、不便を強いることになりました。

留め置かれた榑木は、日明御綱役が水揚げして船明に棚積し、筏組（いかだぐみ）されて掛塚港（現在の静岡県磐田市）に運ばれました。その後、榑木は船積みされて、江戸をはじめ各地に送られました。江戸時代、信州の榑木の樹種は檜（ひのき）や椹（さわら）で、主に屋根板や桶木・曲木に用いられました。信州から管流された榑木の数は、貞享3年（1686年）には年間約250万挺に達しています。

参考文献：
・龍山村村史編纂委員会[編]『龍山村史』［092.1/Ta 95］
・『日本国語大辞典』, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com,［2023年11月27日参照］

文化政策学科 教授
曽根 秀一
Sone Hidekazu

紹介した図書

野村克也[著] 『敵は我に在り』 159/N 95
トルストイ[著]; 中村白葉[訳] 『戦争と平和』 988/To 47
アーネスト・ヘミングウェイ[著]; 島村法夫[訳] 『老人と海』 933.7/H 52
有馬朗人[監修] 『研究者』 407/A 72
宮本又次[著] 『株仲間の研究』 672.1/Mi 77
加護野忠男[著] 『松下幸之助に学ぶ経営学』 335.13/Ka 19
三井高陽[著] 『町人思想と町人考見録』 672.1/Mi 64
七代鈴木与平伝刊行委員会[編] 『七代鈴木与平伝』 289.1/Su 96
鈴木修[著] 『俺は、中小企業のおやじ』 537.09/Su 96
アルフレッド D.チャンドラー,Jr.[著]; 有賀裕子[訳] 『組織は戦略に従う』 335.253/C 33
ヘンリー・ミンツバーグ(ほか)[著]; 齋藤嘉則[監訳] 『戦略サファリ： 戦略マネジメント・ コンプリートガイドブック』 336.1/Mi 47
J.C.コリンズ, J.I.ポラス[著]; 山岡洋一[訳] 『時代を超える生存の原則』 (ビジョナリーカンパニー；[1]) 335.253/C 84
アリー・デ・グース[著]; 堀出一郎[訳] 『企業生命力』 335/G 39
エディス・ペンローズ[著]; 日高千景[訳] 『企業成長の理論』 335/P 38

本の思い出と研究

「とにかく本が好きな子供だった」親に会うとそのように言われる。通学の際、手持ち無沙汰もあってか、常に携えていた。本の魅力は、過去や未来へのタイムスリップ、また、異空間に旅したような感覚、筆者と対話したような想いにもなり楽しい。本に集中するあまり駅で降り忘れたり、器用に本を読みながら駅のコンコースを歩いたりしたことも覚えている。

小学校の図書館で関心ある本を片っ端から借り、低学年の頃は、江戸川乱歩の少年探偵シリーズや歴史上の偉人シリーズはよく読んだ。年間100冊以上借りると図書館から表彰されるが、毎年表彰されていたように思う。中学年になると、より難解な本や名著とよばれるような本を読みたいと思い挑戦した。高学年には、図書館にはない歴史資料など高額な歴史関連の本をどうしても読みたくなり、お年玉の全財産をはたき、購入する始末であった。

中学や高校に進むと部活や勉強の時間が中心となったが、時間をみつけては様々な本を読んだ。弘前藩の初代藩主となった津軽為信など各郷土の偉人の小説、また、部活にも関連してチームや組織について学びたいと、野村克也監督の『敵は我に在り』、トルストイ『戦争と平和』、ヘミングウェイ『老人と海』などを紐解いて読書感想文を書いた。

大学、大学院に進むと、より研究分野にかかわる本を没頭して読んだ。指導教員からは、「本は読まなくても論文を書く際にすぐ手元にあるよう買っておくことが重要である。本を買うことをケチってはいけない」と常々口ぐせで言われ守ってきた。大学院生時代、研究に行き詰った時、手にしたのが本学前理事長の有馬朗人編『研究者』であった。先生らしい章のタイトルであり、「成功する研究者の重要な資質」、「独創力を伸ばす最良の方法」、「評価される研究者、評価されない研究者」など、耳の痛い部分も多々あるが、今も学者の心構えとして大切な本である。

とくに自身の所蔵の本で多いのは、経営史の泰斗である宮本又次の著書である。同氏の本や論文は積み上げると天井に届くといわれるほど多いことで知られるが、とくに『株仲間の研究』はバイブルとしていた。他の著書も含め、比較文化の点でも大いに参考になる。

これまで書評の執筆も多くの依頼をいただいた。その中でも強く印象に残ったのは、加護野忠男『松下幸之助に学ぶ経営学』である。長年、松下幸之助の経営を研究され、経営戦略論、組織論の視点から、エピソードも交えながら松下経営の本質を解明した点で非常に興味深い。

また、企業の経営者の実像や魅力を感じるものも多々ある。戦前のものであるが、三井高陽の『町人思想と町人考見録』では、三井家に伝わる門外不出の口伝や家法が論じられ、当時の当主の考えも垣間見られる。静岡、浜松地域に根差した経営者の自伝や回顧録も紹介したい。静岡市清水に200年以上にわたり本拠を構える、鈴与の前会長（7代目）を取り上げた『七代鈴木与平伝』では、経営者の魅力だけでなく、地域に根差した企業のあり方、経営者の社会的責任、そして7代目のもとで働いてきた人々の回顧も多くみられその魅力が存分に伝わる。スズキ相談役の鈴木修『俺は、中小企業のおやじ』では、相談役独特のユーモアを交えながら、地元浜松に根差すことの意味、グローバルに展開されたエピソード、経営者としてのあり方など要点を鋭く突き、経営学の視点からも大変参考になる。

さらに、自身の研究のメインテーマでもある、「企業の存続」に関連した本も紹介したい。はじめに、チャンドラー『組織は戦略に従う』である。同氏は、「戦略」の概念を経営学分野に最初に持ち込んだとされるハーバード大学の教授で経営史の大家でもある。大学院進学の際に原著で読み込まないと進学できないと言われ、必死に読んだ懐かしい本でもある。また、ミンツバーグの『戦略サファリ』では、組織内の重要性に着目し、米国ではポーターと並び戦略論の双璧として評され、大学院でも輪読書に多用されている。さらに、コリンズ＆ポラスの『ビジョナリーカンパニー』は、出版以来約30年経つが、今もなおランキング上位に位置し続けベストセラーとなっている。その他にもデ・グースの『企業生命力』、ペンローズの『企業成長の理論』などが挙げられよう。これらの本は研究者だけでなく、将来何かしらの組織に身を置く学生の皆さんにはお薦めの本である。少し値は張るが、途中で挫折してもインテリアにもなる。

紹介したい本はたくさんありキリがないが、研究に照らして考えると上記の本になる。生来の本への興味も相俟って、さらに論文を書けば書くほどこれに関連した本を購入してきた。拙稿や拙著を数えると、優に100本を超える。これらは、膨大な本や論文のおかげでまとめ上げることができた。このため、研究室、また住居の複数の部屋は本部屋（資料部屋）と化し、大きな地震があれば圧し潰される危険性を孕んでいる。生涯研究を続けた場合どうなるのか。今は考えないようにしている。

デザイン学科 教授
キャリアセンター長
服部 守悦
Hattori Moriyoshi

紹介した図書

伊丹十三[著]
『ヨーロッパ退屈日記』
914.6/I 88

北杜夫[著]
『どくとるマンボウ航海記』
914.6/Ki 61

坂本龍一[著]
『ぼくはあと何回、満月を見るだろう』
916/Sa 32

岡部いさく[著]
『クルマが先か?ヒコーキが先か?』
537/O 37

コンラート・ローレンツ[著];
日高敏隆[訳]
『ソロモンの指環』
481.78/L 88

リチャード・アダムス[著];
神宮輝夫[訳]
『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』
933.7/A 16

アリーゴ・チプリアーニ[著];
安西水丸[訳]
『ハリーズ・バー：世界でいちばん愛されている伝説的なバーの物語』
673.98/C 72

アリソン・アトリー[作];
石井桃子[訳]; 中川宗弥[画]
『チム・ラビットのぼうけん』
933.7/U 96

関口英里[監修];
ディズニーファン編集部[編]
『東京ディズニーリゾート 魔法のディクショナリー：英語と文化の深掘りガイド』
689.5/To 46

ひとりになったら本を読む。

私にとって大学の図書館は、未だに入館するとピリッとした緊張感に包まれる数少ない場所である。恐らくその圧倒的な知のボリュームに引け目を感じてしまうからであろう。そんな図書館からの依頼であるが、本コーナーの趣旨の一つに「本学学生に薦める良書の紹介」とある。いやいや、これは困ったぞ。時代小説や探偵物、怪奇物であれば山ほど読んでいるが、「学生に薦める良書」として相応しいかどうか。と思い、改めて「良書」を調べてみると「読んでためになる書物」とある。しかし、読んでためになるかどうかはその人次第ではないだろうか？と言うことは結局何を紹介しても構わないということである、と勝手に解釈して選んでみた。

『ヨーロッパ退屈日記』　伊丹十三 著
高校時代、ふとしたきっかけからこの本に巡り合ったが、当時まだ純粋な私にとっては衝撃的であった。自分の価値観に照らして物事の良し悪しを独善的にバッサリ切り捨てる様は痛快極まりなく、我が意を得たりと頷きながら読んだものである。また様々な雑学も学んだ。例えば（今でこそ当たり前の知識であるが）スパゲティーの正しい茹で方として「アルデンテ」が紹介されており、何度も練習した。以降、伊丹十三ワールドにどっぷりはまることに。私にとって永遠のバイブルである。

『どくとるマンボウ航海記』　北杜夫 著
これも高校生の時、たまたま手に取ってその面白さの虜となり、ファンレターを出したところ、なんと返信が届いて大感激！最初はもっぱらエッセイだけだったが、大人の童話シリーズや『楡家の人びと』『夜と霧の隅で』などほぼ全ての北杜夫作品を読破した。頂いた葉書はもちろん今でも家宝として大切に取ってある。

『ぼくはあと何回、満月を見るだろう』　坂本龍一 著
著者がステージ４の癌を宣告されて以降の雑誌連載をまとめた一冊。自らの残された時間を悟り、それに対する不安、過去の思い出、そして自分が去った後の世界について淡々と綴った文が切なくも心に響く。「戦場のメリークリスマス」のメロディーは僅か30秒で思い付いたそうで、「1分でも2分でも命が延びればそれだけ新しい曲が生まれる可能性が高くなる」という言葉は説得力があり、音楽家としての執念と本能を感じる。

『クルマが先か？ヒコーキが先か？』　岡部いさく 著
一冊ぐらいモビリティ関連の本を入れておかないと、と思い選んでみた。軍事評論家の筆者が、文のみならず挿絵も全て描いているという力作。歴史上のクルマとヒコーキを比較し、両者にまつわる逸話や、様々なメカニズムについて解説している。マニアックな内容にも関わらず、いつの間にかvol.Ⅴまで出ていてビックリ！

『ソロモンの指環』　コンラート・ローレンツ 著
「刷り込み」理論を提唱し、ノーベル賞を受賞した動物行動学者のコンラート・ローレンツが動物達の生態をユーモアを交えて描き、同じく動物行動学者の日高敏隆が翻訳した入門書。著者自身が動物に対して行った様々な実験や検証が散りばめられており、何度読んでも本当に面白い。誰にでも薦められるこれぞ良書。

『ウォーターシップ・ダウンのうさぎたち』　リチャード・アダムス 著
以前、図書館の「わたしの一冊」でも紹介したが、野うさぎの一団が新天地を求めて冒険の旅へ出る物語。児童文学と言うジャンルだが、とてもそうは思えない。詩や戯曲からの引用もあり、哲学的ですらある。読後に心安らかになる一冊。

『ハリーズ・バー』　アリーゴ・チプリアーニ 著
ベネチアの端にある世界で最も有名なバーのお話。かのヘミングウェイが通い詰めたことや、食前酒で有名なベリーニ、そしてまたカルパッチョの発祥の地でもある。もはや観光地と化しており、強気の価格設定には閉口するが、それでも実際に店を訪ね、激動の歴史やそれを愛した曲者達に思いを馳せながら飲み、食すのは感慨深い。

『ポピュラー音楽の世紀』　中村とうよう 著
タイトルにはポピュラー音楽とあるが、いわゆるポップスのことではなく、アジアやアフリカ、中南米をメインにワールドミュージックについて網羅した解説書。著者は、雑誌『ミュージックマガジン』の創刊者で音楽評論家であり、その知識と熱意に圧倒される。晩年、世界中から集めた膨大なレコードや楽器のコレクションを武蔵野美術大学に寄贈して間もなく自ら命を絶ったことは残念でならない。

『チム・ラビットのぼうけん』　アリソン・アトリー 著
またまたうさぎの本。小学生の頃の愛読書で何度読んだか分からないほど。いくつかの寓話から成る児童書だが、ウイットに富む詩的な文章は今読み返してもとても美しい。特に卵の謎かけはお気に入りで、暗唱して友達に聞かせたものである。

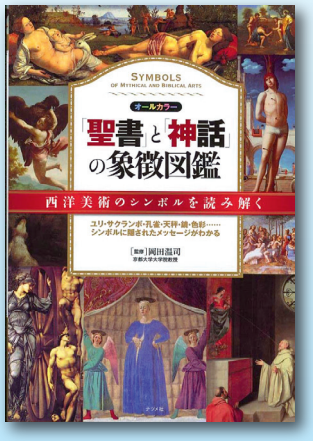
『魔法のディクショナリー』　関口英里 監修，ディズニーファン編集部 編
ディズニーパーク内には数多くの看板やポスター等があるが、それらの全てを翻訳した解説書。ただ翻訳するのではなく、その背景にある物語や歴史などを紐解き、文化的資料としての側面もある。ディズニーオタクの娘が買ったのを見つけ、思わず貸してもらった。ちなみに私は訪れる際に『東京ディズニーリゾート 植物ガイド』を持参して季節ごとの植栽をチェックしている。決してオタクではない…。

ひとりになったら本を読む。誰にも邪魔されたくない贅沢な時間。読書は楽しい。そして私は分厚い本が好きだ。なぜかと言うと楽しいことは終わって欲しくないからである。読みながらまだ半分以上ある、とニヤニヤする。皆さんも一緒にニヤニヤしませんか？

特集　わたしの1冊　～おすすめの本を紹介します～

『「聖書」と「神話」の象徴図鑑』

岡田温司 [監修]
ナツメ社 , 2011
[702.099/O 38]



私はこの本と大学の図書館で出会い、あまりにも面白かったので自宅用も購入しました。内容を簡単に言うと、西洋絵画の中に描かれるアイテムやキャラクター、記号が何を表していて、その絵画にはどんな物語があるのかを読み解くための図鑑です。西洋絵画ですから、ほとんどは聖書と神話の世界観です。しかも絵画を読み解くための参考書なので、活字の解説だけでなくカラーの画像もたっぷりと掲載されています。象徴図鑑の象徴を難しい言葉でアトリビュートと言います。よくある例は、ハトは「平和」の象徴、アダムとイブが食べてるものと言えば「リンゴ」というアトリビュートです。このリンゴの意味を知っている人はあまりいないのではないでしょうか。また、彼らは裸を隠すために股間を葉っぱで覆う姿がよく描かれますが、実はその葉っぱにも意味があります。

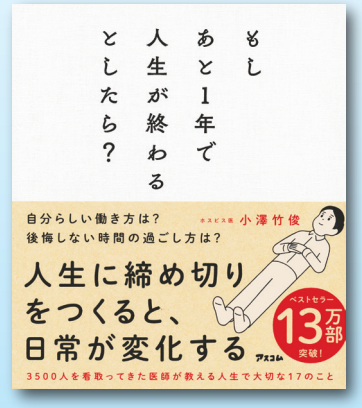
ここまで読んでいただいた人の中に、「美術や宗教にそもそも興味がないしなじみがない」という人もいらっしゃるかと思います。本書の最大のポイントは別に古代の神話や聖書の知識がなくても、アイテムやキャラクターから索引できる点です。例えば「ドラゴン」「ユニコーン」「悪魔」「ポセイドン」「ダヴィデ」「弓矢」「色彩」など、実際に絵画によく登場するパターンを目次で調べて、部分的に学ぶこともできます。特に最後の「色彩」は現代人に最も分かりやすいと思います。言い換えるとその人のイメージカラーです。アニメやアイドル、特撮ヒーローなど何でもよいのですが、リーダー格のイメージカラーは大抵赤じゃないでしょうか。個人的な印象ですが、「かわいい癒やし系」担当の人はピンクのイメージがあります。絵画の世界でも中世やルネサンス期から、こうした色が何かを暗示するという考え方がありました。

ともあれ、前述した例の単語を聞いたことがない人はほとんどいないはずですし、何となくどんな姿かたちをしているか想像がつくでしょう。これら一つ一つには必ず象徴するものがあり、この象徴図鑑は「暗示」や「伏線」、「あるあるネタ」の宝庫なのです。美術を勉強するつもりがなくても、この本を読んだ後に触れる絵画、彫刻、ゲーム、アニメ、デザインの中の表現がまた違って見えるかと思います。

【文化政策学部 国際文化学科 4年　稲勝 まりあ】

『もしあと1年で人生が終わるとしたら?』

小澤竹俊 [著]
アスコム , 2021
[159/O 97]



みなさんは、残りの人生の長さについて考えたことがあるでしょうか。ぼんやりと考えたことがあるという人もいれば、全く考えたことがないという人もいると思います。どんな人にも訪れる人生の終わりについて、様々な視点から考えられる1冊を紹介します。

普段はあまり本を読まない私が思わず手に取ったこの本は、これまでの人生を振り返り、これから自分がどう生きていきたいかを考えるきっかけを与えてくれる内容となっています。日々忙しく過ごす中で、自分の人生にとって最も大切なものに気づき、自分らしい人生を見つけることは非常に難しいことです。そんなとき、「もしあと1年で人生が終わるとしたら」と考えてみると、どうでしょうか。今日明日をどう過ごすかという目の前のことから、どうしても行っておきたい場所や会っておきたい人など、普段はあまり考えないことへ思考が変化したのではないでしょうか。今この質問によって巡らせた思考が、あなたの人生にとって最も大切なものに気づく大きなヒントになっていると思います。

人生は、毎日選択の連続です。その選択には、今日の食事をどうするか、何を着て出かけるか、といった小さな選択から、将来はどんな職業に就くか、どこに家を建てるか、など人生を左右する大きな選択まで様々なものがあります。時にはその選択について悩んだり、後悔したりすることもあるでしょう。しかし、そのような悩みや後悔も含めた選択の集合体が、その人らしい人生を形作っていくと、この本は教えてくれています。

最後に、印象に残った一節を紹介して終わりたいと思います。「人生とは、美しい刺繍を裏から見ているようなものだ」という言葉です。刺繍を裏から見ているときは、一つひとつの縫い目が何を意味しているか全く分からないが、それを表から見たとき、初めてその意味や美しさが分かる、というものです。人生には楽しいことばかりではなく、苦しいこともたくさんあります。しかし、その一つひとつに必ず意味があるのです。人生の終わりなんてまだまだ先、そう思っているあなたにこそ読んでほしい1冊です。

【デザイン学部 デザイン学科 4年　早川 由菜】

特集　わたしの1冊　～おすすめの本を紹介します～

本著は、ことばには値段がついており、その価値はお金に換算できるということを、様々なデータを示しながらわかりやすく解説した本です。なお、ここでいう「ことば」とは、日本語や英語のような「言語」だけでなく、方言、敬語、口語表現などもすべて含まれています。図書館に言語関係の書籍、経済関連の書籍はたくさんありますが、両者を結び付けた本は管見の限り、この井上史雄氏の著作に限られます。

ことばを対象とする言語学研究は、一般的に、すべてのことばは平等であるという立場に立っています。それは、未開民族の言語は原始的で、文明国の言語こそ発展したものであるというかつての誤った考えに対する反省でもありました。もちろん、ことば自体に優劣はありません。ただし、そのことばを操る人間（集団）が絡むとそう単純な話ではなくなってきます。本学のような複数の外国語を履修できる環境にいると、さらに実感できるかもしれません。「～語ができれば就職に有利」、「～語は実用性はない」、そのような考え方は間違いであるとも言えません。教材や辞書一つとっても、英語などの有力言語は、選択肢が多く発行部数も多いため、結果として安く入手できるのに対し、少数言語の教材や辞書は数が少なく総じて高いです（本著pp13-16にも言及あり）。半年も勉強すれば、ある程度文章が読めるようになる外国語もあれば、活用を覚えるのに精いっぱいという外国語もあります。後者は経済的にみるとコストパフォーマンスが悪いかもしれません。

本著の大半はタイトル通り、日本語を中心に展開していますが、敬語や方言の問題も、外国語と同様に、時代とともに変化する人々の価値観と深い関わりがあると述べています。

値段や経済の話がたくさん出てきますが、本著は決して利己的な価値観や差別を助長する本ではありません。著者である井上史雄氏は方言研究（社会言語学）が専門です。社会言語学は、社会的に重要視される場所あるいは集団の話すことばは社会的な威信（prestige）がつくといった不平等を認める立場に立っています。ことば自体に優劣はありませんが、ことばを操る集団は、経済力や影響力のランク付けから逃れられません。

日本語教育、外国語教育に興味のある人はもちろん、漠然として次に何語を勉強したらいいか迷っているような一年生にもおススメです。専門用語はほとんど登場せず、語り口も軽妙です。

本当はこれら広い範囲のテーマすべてを1冊にまとめたかったが、理論的整合性の問題と、それよりも厚くて高い本が売れるかという、それこそ値段の問題がからんで、結局一番基本的な部分だけを刊行することになった。（あとがきより）

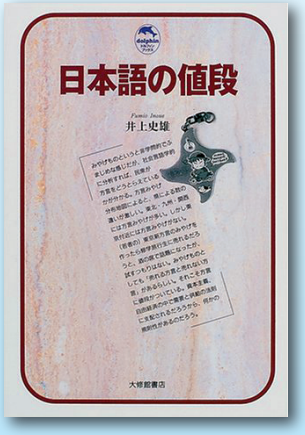
【多文化・多言語教育研究センター 特任講師　羅 沢宇】

『日本語の値段』

井上史雄 [著]

大修館書店 , 2000

[810.13/I 57]

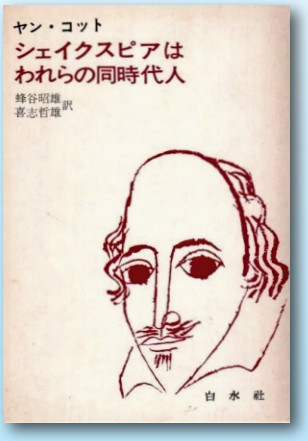


『シェイクスピアは われらの同時代人』

ヤン・コット [著]; 蜂谷昭雄 , 喜志哲雄 [訳]

白水社 , 1968

[932.5/Sh 12]



本著は、ポーランド出身のシェイクスピア学者、ヤン・コットによるシェイクスピア論集です。私がこの本を手に取ったきっかけは大学の授業でシェイクスピア作品に関する課題が出されたことでした。確か『夏の夜の夢』に関して、自分なりの視点で論じるとか、そのような課題だったと思います。当時、下北沢で演じられるような小劇場演劇のファンを自認していた私は、外国の古典であるシェイクスピアの面白さが分からず、それゆえに「自分なりの視点」なるものも見出せず困っていました。そこで自宅にあったこの本を取り敢えず開いてみたのです。

驚いたのは「喜劇」に分類される『夏の夜の夢』の中に暗いイメージが読み込まれていることでした。曰く、いたずら好きの妖精パックは「他面においては恐ろしい悪魔のホブゴブリン」(p.209) であり、恋人たちはいずれも無個性で取り替え可能な存在であり(「恋の相手にはもはや名まえも顔もないのである。その彼なり彼女なりは、たまたまいちばん手近にいた異性だというにすぎない」(p.213))、妖精の女王ティターニアのために歌われる子守唄の中には毒々しい虫たちが登場する…。コットは、妖精と人間によって繰り広げられる祝祭喜劇の中に、画家ゴヤの版画にも似た「獣性の暗い世界」(p.223) が広がっていることを指摘したのです。この読書体験によって、私は芸術というものは受容者の側が能動的に、多層的に読むこともできるのだということを知ったように思います。つまり、「解釈」という行為に出会ったと言えるかもしれません。それ以来、なんとなくシェイクスピアが身近にあり続けます。

原著の刊行から60年以上が経過しているため「同時代人」というよりこの本自体が既に古典のようになっているのですが、最新のシェイクスピア研究に触れる前の入り口として、読んでみるのも良いのではないでしょうか。

付記:　字数の関係で触れられなかったのですが、日本語版に寄せられた作者の序文も、英語ネイティブではないシェイクスピアファンとして大変共感できるもので私は大好きです。

【文化政策学部 芸術文化学科 講師　稲山 玲】

特集　わたしの1冊　～おすすめの本を紹介します～

『美術の歩み』（上）（下）改訂新版

E.H. ゴンブリッチ [著]; 友部直 [訳]

美術出版社 , 1983

[702/G 62]

大学に入り、学問の分野を問わず、専門的な内容を学ぶために、学術書を手にとることになったとき、なんとなく自分が大人になったような感じがしました。と同時にいざ読書を始めると、ページをめくって文字を追っていくことがやっとの状態であることに愕然として、自己嫌悪に陥ったものです。幼少期より本の虫で、小学生の時分には昼に一人で本ばかり読んでいて、図書館の蔵書は全て読んでしまった私にとっては、大きな挫折でした。兎に角、頭に何も入ってこないのです。美術や芸術の分野や私が専門としていた映画や映像の理論的な基盤になっていたのは、哲学や心理学に始まり、精神分析学、文学理論、記号論や言語学といった様々な学問大系で、平易な表現で記述されているものではなく、ポスト構造主義以降の現代思想の流行も相まって、難解な書物ばかりでした。ソーカル事件を知った時には、勝手に背負ってきた肩の荷がふと軽くなった気がしたのをよく覚えています。

ちょうど、そんな時に誰に勧められたかも、偶然手に取ったのかも覚えていませんが、Gombrichの“The Story of Art”に出会いました。当時、専門書の翻訳が余りに解らないので、原著で確認するのがくせになっていたことが功を奏した形でした。手に取ったのは比較的新しい本（ファイドン社1995年刊のペーパーバック16版でした）に見えましたが、序文を読むと1950年の発刊であると書かれていて、古い本であるにも関わらず、なんと平易な英語なのかと感動したのをよく覚えています。難解なものを読み解くのが専門的な学問探究だと思い込んでいた時期の私にとっては、一種のカルチャーショックでした。目から鱗が落ちるとはこういうことか、と膝を打ちました。専門用語が羅列するわけでもなく、高校の美術でも取り上げられるような有名な画家や彫刻家、建築家の作品の図版が１ページに１枚の割合で掲載されていて、ビジュアル的にも理解しやすい構成が、原著で読むことの忌避感を軽減してくれました。すぐに、訳書である『美術の歩み』上下巻を見つけて、言葉がすんなりと身体に落ちてくる感覚は、自身を取り戻してくれるのに充分でした。その後、ファイドン社からは長らく翻訳版は出されなかったものの、2007年に同じ装丁で一新された翻訳陣で出版され、2011年にはより手に取りやすいポケット版が刊行されました。特にポケット版はすぐに2冊手に入れて、ポケット六法と同じように私にしては珍しく紙の本としてすぐ見える所に並べていました。こんな良書であるにも関わらず、後にずっと心に引っかかり続けている一文があります。それは序文の「私がとくに念頭に置いていたのは、美術の世界を自分で発見したばかりの十代の読者だった」で、よく考えれば10歳も10代であり、いくらなんでも小学生にはないだろうというツッコミを抑えつつ、ゴンブリッチの平易な言葉で難しい内容を伝えることの大事さを教訓にしています。

【デザイン学部 デザイン学科 准教授　百束 朋浩】

私が紹介する1冊は、デザインとは直接関わりのない時代小説ですが、フィクションを読むことは、デザイナーにとって大切な発想力・想像力を鍛え、間接的にデザイン能力を高める手段だと思っていて、私は積極的に読むようにしています。

漫画や映画を見ることでも、空想的な世界観の映像表現、ファンタジーや冒険的な要素の演出、SF映画から未来要素を学ぶことができて勉強になりますし、私もよく活用します。しかし、映像・画像のない文字だけから環境シーンや登場人物の感情を想像し、ビジュアル化する力を鍛えるには、フィクション小説が一番だと思っています。

私は、著名な現代小説作家の宮部みゆきさん・東野圭吾さん・池井戸潤さんもよく読みますが、同じくらい時代小説も読みます。最初に読んだ歴史小説・時代小説は、王道ですが織田信長を題材にした本でした。その後、源義経を読んで、次第にマイナーな大名や江戸時代の偉人・町民を描いた小説を読んでいく中で、最近読み応えがあったのが、今回紹介する『早雲の軍配者』です。

みなさんは軍配者を知っていますか？軍師という言葉は有名ですが、軍配者は聞き馴染みのない言葉だと思います。私はこの小説で始めて知りました。この新しい単語に引かれて読み進めていくと、軍配という言葉以外にも、北条早雲、足利学校や上杉憲政といった聞いたことはあるものの、あまり著名でない人物・お城・地名や、現代とは異なる常識や規則が次々と出てきて、知的好奇心と興味が続く仕掛けが巧妙に施されています。

主人公や登場人物の気持ちに感情移入がしやすく、見たこともない室町・戦国時代の町並みや景色、生活者の暮らしぶりを容易に想像させてくれる富樫倫太郎さんの文章表現テクニックも秀逸です。

小説の舞台は、主に関東近郊です。浜松からは比較的近い距離なので、神奈川や山梨、栃木への旅行・観光の前に読むと、また違った見方をすることができると思います。

【デザイン学部 デザイン学科 准教授　宮地 良治】

『早雲の軍配者』

富樫倫太郎 [著]

中央公論新社 , 2010

[913.6/To 21]

特集　わたしの1冊　～おすすめの本を紹介します～

私がおすすめしたい1冊は、『君の膵臓をたべたい』です。2017年に映画化されたことも話題となりました。作家・住野よるのデビュー作です。

実は高校1年生の時、学校で開催されたビブリオバトルでもおすすめとして紹介したことがある思い入れの深い本です。当時の友達に、一度読んで欲しいとおすすめして回ったことは記憶に新しいです。私にしては珍しくハードカバーの本を購入し、何度も何度も読み返しました。今では剥がれ落ちてしまいそうなページが何カ所もありますが、それでも手に取る度、心の奥がぎゅっと締め付けられるような感動を手放したくないとも思います。

この本との邂逅は、気ままに立ち寄った本屋で目立つように陳列されていたのを、不意に手に取ったことから始まります。「膵臓」「たべたい」という少々猟奇的にも思えるタイトルと、満開の桜を背景に春光に照らされながら立ち並ぶ男女2人が描かれた表紙という相反する魅力にどうしようもなく惹かれたことを覚えています。

主人公の「僕」は、人気者のクラスメイトである山内桜良の秘密を偶然知ってしまいます。秘密とは、彼女が膵臓の病気で余命幾許も無いということ。「僕」は、彼女の家族以外で秘密を知る唯一の人物となり、「桜良の死ぬ前にやりたいこと」に付き合うなかで次第に心を許すようになります。正反対の性格の2人が、互いを見つめ合う中で自分自身を見つめ直し、成長していく物語です。

物語の結末として待ち受けるのは、予想どおり「桜良の死」ですが、彼女の死すら思い描いたとおりにはいきません。「僕」が彼女の死後、壊れたように泣き崩れる場面では、何度読んでも涙が止まらなくなります。そして、「君の膵臓をたべたい」という言葉の本当の意味を理解した時、もう一度この本を読みたくなるはずです。彼女の言葉を胸に、前向きに歩き出した「僕」のように、きっと読む人の心に響くことでしょう。

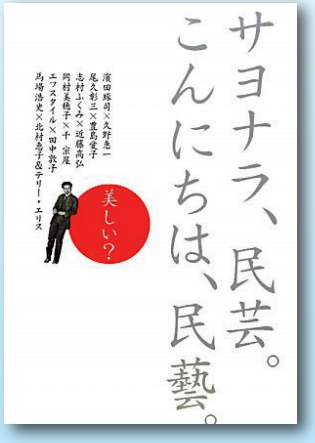
【大学院 文化政策研究科 2年　佐野 菜子】

『君の膵臓をたべたい』

住野よる [著]
双葉社 , 2017
[913.6/Su 63]

『サヨナラ、民芸。こんにちは、民藝。』

里文出版 [編]
里文出版 , 2011
[750/R 33]



大学図書館の書棚を目的もなく眺めていた時に、本書のタイトルが目に飛び込んできました。そこは民藝に関する書籍の棚でした。周りの本はタイトルで内容がなんとなく想像がつくけれど、この本は民藝に関わる本ということ以外よくわからない…。私はその時人生で初めて、ジャケ買いならぬ「タイトル借り」をしました。

本書は、「民藝運動の父」と呼ばれる柳宗悦を巡る、民藝に深く関係する人々の六つの対話が収録されています。つくり手だけでなく、売り手、買い手など多角的な視点から「民藝」を考える内容です。どこまでが民藝なのか、今の民藝とは何か、新しい民藝は可能なのか。その判断は私たち読者に託されます。

衝撃的だったのは、柳宗悦を礼賛する内容かと思いきや、柳と密に関わりがある世代の方からは意外にも批判的な意見も多くあるということです。本書を読み進めていく中で柳の思想や人となりも知ることができた点が非常に学びになりました。

今年3月初めて日本民藝館を訪れ、世界各地の柳が蒐集した民芸品を鑑賞しました。無名の作家たちがつくった「民衆の美」は、芯の通った美しさがあるものの、何かこちらに語りかけてくる訳ではなく、ただそこに在る、という感覚が私にとって心地の良い空間に感じました。本書のある対談で、

身体を通して、繰り返し繰り返しする仕事の中で、自ずから「無心」のものが生まれて来る。そのものが具体的「無心」を現すのですね。

という言葉があります。民芸品の美しさはつくり手が美しく造る意識をしているのではなく、つくり手が仕事を繰り返していく中で、素材本来が持つ美しさを無意識に掬い上げて形作っているからこそ美しいのだと気づくことができました。同時に、「それがなぜ美しいのか、なぜ良いのか」、自分の中のものさしと言葉で語れる人間になりたいと強く思いました。

民藝を知っている人も知らない人も、もっと民藝のことを深く知りたい！と思える、読み応え抜群の一冊です。

【大学院 デザイン研究科 1年　鈴木 佑季】

貴重資料「和田文庫」のご紹介

和田家は、天竜川中流、静岡県磐田郡龍山村西川（現・浜松市天竜区龍山町大嶺）に数百年にわたって続く旧家で、山林業・酒造業を営み、天竜川の舟運も統轄していました。和田家は代々「佐太夫」を名跡としていました。

同家14代の和田明氏（元・静岡県陸上競技協会理事長）は、戦後間もなく、土蔵と離れ座敷を残して、浜松市に居を移されました。明氏は「何もないほうがいい。残されたものを後生大事に抱えているよりも、自分の手で作り出したい」と仰り、1980年に貴重な蔵書を静岡女子短期大学附属図書館（当時）へ寄贈されました。「和田文庫」として整備された蔵書等は、その後当館へ移管されました。

和田家蔵書の多くは、同家先祖の邦慶氏（生年不詳-1773）、邦孝氏（1774-1809）、邦道氏（1781-1857）によって集められたものです。蔵書は、残された土蔵の特別に設えた押入で、倹飩箱28個に納められていました。これらは防虫措置や年2回の陰干しなど、格別の配慮をもって代々守られ、極めて良い状態で保存されてきました。

蔵書の多くは、内山真龍（1740-1821）と親交のあった邦孝氏の蒐書だと思われます。内山真龍は遠江の国学者で、賀茂真淵の門に入り『日本書紀』『風土記』といった古典の研究や著述を行いました。彼は『遠江国風土記伝』などを著し、遠江国学の基礎を築いたことで知られています。

蔵書の内容は『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』『金葉和歌集』『千載和歌集』などの和歌集、『八雲抄』『土佐日記』『伊勢物語』『源氏物語』『徒然草』などの古典類、『大雑書』、経典、風土記、謡曲本、作庭や香道の本など幅広く収集されているほか、『圓機活法』などの漢籍類も多数あります。また、保存状態の良い『本草綱目』や『和漢三才図会』に加え、「日明御綱絵図」などの絵図も含まれています。

蔵書はただ揃えて置かれたのではなく、実際に読むため、学ぶために使用された跡が見られ、遠州国学の先人達の気迫が伝わってくるようです。

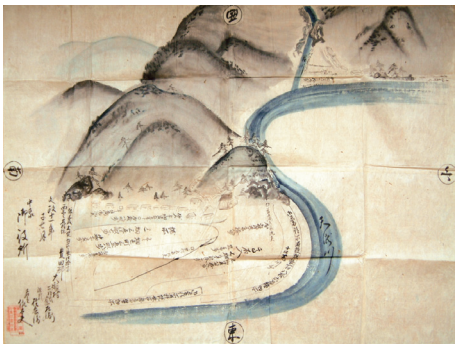
■和田文庫の概要
資料（書冊類1,152点、文書類92点）
物品（鎧櫃入甲冑1領、膳部1客、飯詰1個、水盤2器、籐文庫1函）

■参考文献：

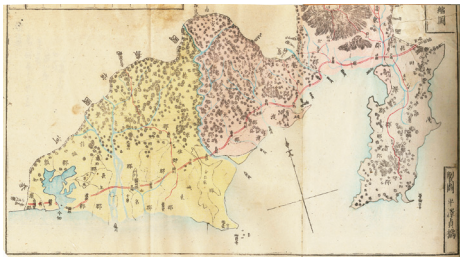
・和田文庫目録編集委員会[編]『静岡女子短期大学蔵 和田文庫目録』（静岡女子短期大学附属図書館, 1982）
・内山真龍資料館 Webサイト https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/tn-machi/culture_art/matatsu/ [2023年11月27日参照]
・『日本国語大辞典』, JapanKnowledge, https://japanknowledge.com, [2023年11月27日参照]

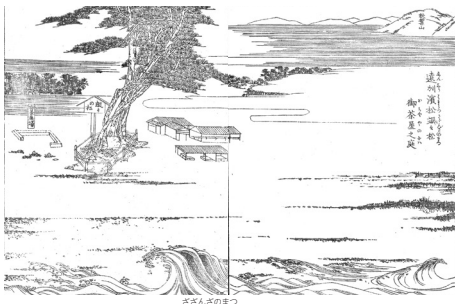
静岡県磐田郡龍山村西川 和田家全景

米川十組香私記


鮎釣村御普請場絵図

都名所圖會


静岡縣二州二十三郡二十二驛之縮圖（『静岡縣誌』）


遠州濱松颯々松（さざんさのまつ） 御茶屋之庭（『築山庭造傳』）

ミックス
紙 | 責任ある森林管理を支えています
FSC® C021550
www.fsc.org